

手記

抑留体験記

北海道 庄司 忠

抑留体験記執筆にあたり、一民間人の少年の歩んだ九年に及ぶ生き様を記し、収容所の裏面を書き遺そうと思います。後世は戦争のない平和の日々が永遠に続く事を願いながら。

戦争とは互いの国の軍のみの戦いに終わらず、必ず一般の人々の犠牲を伴う事を忘れてはならないと思います。今もお、真の戦争は終わっていない事を残念に思い、一日も早い戦争の後遺症の消える日を念願してやみません。

抑留地への移送は、船の場合は、貨物船の船底に便器がわりの樽を置き、ハッチは閉め切ったが汚物は溢れ散っていました。列車の場合は、貨車は扉に施錠されたままでトイレはありませんでした。客車の場合、金網の張った上・中・下三段に仕切られ、トイレは一日一回で水は支給されませんでした。

収容所での生活は、すべて重労働で、食事が一日一片の黒パンと、一旦一回、水に塩を入れたスープがカップに二杯のみの支給で、木の二段ベッドに布団も与えられず横になるので、骨盤の横がタコになりはがれて出血しました。

その上、少しばかりの食事もしア人や他の民族に奪われて飲まず食わずで重労働に従事。また、風呂は月に一度手桶二杯を浴びるだけ。シラミと南京虫に残

り少ない血まで吸われた上、作業場ではマシカ（蚊）にまで追い打ちを掛けての間断の無い攻撃に悩まされ続けました。

作業は伐採と土木工事と洗濯場と石炭荷役に従事しましたが、収容所入所当初は二年間極度の栄養失調で体重三十キロを割りました。休日はほとんど無く、時折の休日は人員点呼で一日無駄になってしまいました。医療については、熱が三十七度三分以上にならないと休みは貰えません。薬は一般収容所ではアスピリンとヨードチンキのみで、聴診器は木製の一輪挿しのごとき物。特別支給の油や砂糖は間違っても我々の手に渡ることはありませんでした。

たとえノルマを百パーセント以上あげても、途中でマフィアや権力者にカットされます。幾ら体力が弱っても、定期の身体検査を受けぬ限り仕事に行かない者は独房入りとなり、勿論食事も減ぜられます。それでも重労働するよりはと思ひ、弱ってきたらよく独房へ入り寝ていました。

収容されている者は全員が当時のソ連での犯罪者な

ので、特に洗脳教育は受けませんでした。栄養収容所では時には演劇とか映画を上演する事がありました、私にはパン一片の方がどれ程あり難く思えたかしれません。

栄養失調となり自分の力で体を動かせぬ状態となると、人間の極限なのか思考力など全く失せて、ただ息をしているのみで食事すら思うように口に入らなくなります。いつかは生きていたなら国に帰る事が叶うかもしれないと漠然と頭の片隅で右往左往しながら横たわり、ようやく生きのびました。

ロシア人の収容所の決まりは、裏切者はどこの収容所に行っても必ず殺されるということでした。中でも、同じマフィアでもチェチェン人は孫子の代まで仇を討つといった決まりがあります。また、時には労働者とマフィアの死闘があり、看守と犯罪者の戦いも目の当たりに体験して参りました。

重罪犯は主に政治犯で、最高二十五年プラス五年の刑で、バラックの床下を掘り堀の外まで掘り進みいま一步の所で密告され逮捕されましたが、彼等は何度で

も脱走すると言っていました。後に密告者は殺されました。また脱走の途中で捕らわれたなら生きていても死んでいても必ず元の収容所に連れ戻され、死体の場合は門の所に吊るして全員に見せて警告することになっていました。

日本人で陸軍中野学校出身のD中尉も門前に吊るされ、胸に大きな穴があいておりました。なんと多くの仲間が病のため、または不慮の事故で無念の思いを残してこの世を去って行ったことか。

昭和二十四年冬、ソ連最高裁判所の要人と収容所が同じになりましたが、当時スターリンの至上命令で樺太から二万人の罪人を作りシベリア開発に充てるようにと達しがあり、どんな些細な事でも法に触れることになって「誠に気の毒な事をした」と謝罪しておりました。

例を挙げたならキリはありませんが、無断欠勤七日は七年の刑、馬を殺すのを見ていた少年の刑は三年、自分のイモ畑に残されたイモ一箱を掘って食べた少年が七年の刑や、北海道に密航失敗で捕らわれて三〇五

年の刑、スパイ容疑なら十年〜二十五年の刑で、引揚船に乗船の折踏んだ新聞の裏面にレーニンの写真があったばかりに十年の刑といったように、数えたら枚挙にいとまがありません。

ちなみに、彼ら人間はあくまで消耗品であり、品物や生き物（使役用）は国家財産なのであって、判決の時には、「反政府的で非協力的であり、その上国家の財産に甚大な損害を与えた罪により何年が適当な刑期です」で終了です。どんな反問をしてみても一方的な裁判に終始し、あまり反問すると決まった刑期に上乘せされてしまいます。その反面、収容所の中で罪人同士がパン一個で殺人を請け負って殺しても、刑期満了が二年先のばしになるだけです。

日本人一人きりで生き延びることは筆舌に尽くしがたいことです。収容所の生活を切り抜けるのは言葉では表現出来ぬ苦しさや孤独との闘いの連続で、我れながらよくぞ生き長らえて祖国の土を踏めたものよと振り返っております。

平和に満ちた現在の世に感謝の念で一杯です。この

慶びよ永遠なれと祈りながら、我が少年期の抑留体験記の執筆に移ることにします。軍人とは異なる信じられぬような体験記となることでしよう。

一般帰国者は昭和二十八年より三十四年まで続き、その回数は十八回に及びますことを付記して参考になればと思います。

夏は白夜、冬はオーロラの輝きを仰ぐ。

戦いが終わり真の平和が訪れようとしていたのに、人生の悲劇がその時から始まりました。

昭和二十年八月十五日長い戦いに終わりを告げて、当時住んでいた樺太からソ連軍の進駐に備え婦女子・老人・病人等の引揚げが開始されました。私の母や妹達も八月十七日大泊港から連絡船宗谷丸にて北海道に向けて引き揚げました。

当時の大泊港は一刻も早く引き揚げるべく奥地から来た人々の波で埋め尽くされており、貨車の上で、また野営の最中にお産をする者あり、一方でわが子を捨てる者あり、あるいは一家で自決する者すらあり、悲惨を極めました。樺太はソ連と地続きに国境を接して

おり、八月九日以降は戦場と化し多数の軍人や民間人の犠牲者を出し、いまだにその遺骨すら収集できずにあります。

戦闘は八月十三日まで続きました。当時は樺太在住の男性は数え年十六歳から国民戦闘隊員として防衛の任に就いており、戦後の私共国鉄職員は婦女子の引揚げ輸送の任を命ぜられて引揚げ証明書は交付されず、従って残留する他なく居残る事となりました。

その間に二度程乗船することが出来たのですけれど、それは八月二十日朝、小さな漁船に乗ったのですが、警察官と憲兵の方々が乗船し私どもは下船させられました。二度目は八月二十一日未明、貨物船海運丸に乗り込みましたが、今度は陸軍軍人らが多数来て、婦女子をはじめ病人など多くの人が下ろされて埠頭に置き去りにされ、軍人のみが北海道に向け出航してしまいました。

やむなく翌朝までの勤務もあり職場に戻り引揚げ業務を続けましたが、父が重病で翌二十二日朝家に戻ると父親の姿がなく、街中を捜しましたが見当たりませ

んでした。二十三日朝再び父を捜そうと家を出ましたが、未明に進駐して来たソ連軍に日本軍人の脱走兵として捕虜となり收容されました。

夜半に便所の窓から脱出し、翌二十四日に三十二キロ離れている長浜村まで自転車で父を捜すべく出発しましたが、離村の女麗にてソ連海軍の兵に捕らわれ、すきを見て自転車にて脱走し水兵に銃撃されました。

何とか逃げ切ったのも束の間、次の村、小田井にてソ連水兵二人に銃撃を受け、下り坂を必死に自転車のペダルを踏みつづけ崖から転落し怪我をしました。ソ連の兵士達がいなくなるのを待つて自転車を引きずり上げましたが自転車は破損し乗れなくなり、主を失って放たれていた馬に乗り目的地に着きました。そこで父が北海道に渡った事を知り安心すると同時に天涯孤独の身となり、たまらなく心細くなり途方に暮れ大泊のわが家に戻って来ました。ところが家は朝鮮人に占拠されており、一度に家も家族も、すべてを失ってしまいました。

その間に職場の者もほとんど逃げてしまい、少しば

かり残された者が職場も兼務を強いられて、責任者として弱冠十七歳で全責任を負う羽目になり、後日抑留の憂き目に遭遇する事になります。

ソ連政府はその間「お前は日本国鉄時代余分に給料を支給されていたので支給出来ぬ」との事で給料は支給されず、少しばかり残された荷の中から物々交換で空腹をしのぎました。ようやく空家を探しソ連兵と共同生活に入りましたが、その家もソ連兵の火の不始末で全焼し、全くの裸になってしまいました。

その揚げ句に職場の変圧器が漏電して変圧器を二基焼失し、直ちに復旧しましたがソ連の軍事裁判にかけられる事になりました。事故復旧直後一昼夜にわたり故意に燃やしたと拷問にあい、「仲間の名を自供しろ」と身動き出来ぬ程にされました。

軍事裁判をするため豊原市に送られましたが、收容されるまでの三昼夜の間雪の吹き込むコンクリートの床の上に置かれ、一片のパンもまた一滴の水すら与えられずに取調べを受け收容所送りとなり、一週間後に軍事裁判を受け一方的な形ばかりの裁判で判決は三年

となり、「もし不服があれば二十四時間以内に控訴するように」と言われるので直ちにその場で控訴しました。二時間後に再度裁判となり、結果は二年刑期を加算され五年の刑が確定しました。

一カ月後の四月二十四日にはシベリア送りとなりました。途中乗船港の真岡で脱走を試みましたが失敗し、二十六日ウラジオストックに上陸し収容され、五日後に名前を呼ばれ別室に移されました。

待っていたのは北朝鮮から移送された朝鮮人九十五人で、その中に日本人一人入れられました。挨拶する暇もなく全員にリンチにあい、死の寸前まで行き意識を失い、以後ウラジオストックよりハバロフスクまで寸断なくリンチにあいました。ハバロフスクでようやく日本人と出会ったのも束の間、私はリンチの後遺症で動けず、その上リウマチとなり歩行も出来ずまたも一人取り残されました。

やっと動けるようになり、チタとイルクーツクを経てクラスノヤルスク州のポイマに到着すると、またもウラジオストックで別れた北朝鮮の一行と同じ班とな

り、以前にも増してのリンチの連続で食事も削られ、最後は半死半生となりソ連兵の看守長に助けられました。時すでに遅く体重も三十キロとなり、何とかロシア人の班に入れてもらいましたが、次の身体検査で四級となり、廃人処分で休養収容所送りとなりました。

レシヨウテイ駅から北に向かい、二千人程いる収容所でようやく数人の日本人と出会うことが出来ました。翌年春にはまた伐採や土木の重労働となり、日本人とは会う事もなくロシア国籍の各民族や各国の人々の中で働きましたが、ロシアマフィアにピンハネされたり略奪されたり、食事もせずに重労働にかり出され、たちまちにして廃人となりました。

ちなみに、ソ連の収容所では労働者の階級を四段階に分けられました。一級は体格良く肉付きの良い者で重労働に耐えられる者をさし、二級は次段階の重労働に耐えられる者をさし、三級は軽労働に向く者で主に農作業もしくは収容所内の仕事が出来る者をいいました。その等級の決め手は、一級は見るからに丈夫そうな者、二級は尻の肉を引っ張り肉付き豊かな者、三級

は尻の肉が少しばかり皮と共に引っ張って付いてくる者で、四級は皮のみ長々と引っ張られ皮膚からバラバラと粉が散る状態の者をさし、関節のみ目立ち正にミイラのごとき者で、これを廃人処分としました。

その間、木の二段ベッドの上に布団も毛布も与えられずに着たままで死人のように横たわり、思考力も失い生ける屍のごとく、わずかに与えられる食事を口にしても味すら分からず、ただむさぼるがごとく腹に納めてしまいます。廃人処分を受けた身は一人で立ち上がることもまた歩くことも容易ではなく、まして話しか合う同胞とてなく、歳月の流れと共に自分が日本人であることすらも忘れがちとなりました。北極海に近い所まで送られた時には、冬でも零下五十二、三度は珍しくなく、一度は零下六十三度を経験しました。

昭和二十五年、ほとんど帰国を諦め、ロシア人兄弟でマフィアの大親分に取り入り子分となりました。その後は休養収容所の洗濯場に入り、そこで主任のグルジア人にロシア語の読み書きを教えて貰い、その人が刑期満了して帰国し、かわりに私が主任となり、その

収容所の日本人二十人程を採用して、刑期満了まで移動することもまた労働に従事することもなく、昭和二十七年三月三日までその収容所にいることが出来ました。

その間相変わらず日本人と朝鮮人の合同班であり日本人は常につらい思いを強いられており、日本人の間から日本人だけの班を何とかして作って貰えないだろうかと相談を受け、早速所長と人事課長に相談しほば認可が降りる所まで決めたのですが、日本人の中には彼等と通じている者がおり、密告されて前記の朝鮮人に殺すと短刀を突き付けられました。

当時日本人の軍人も同じ収容所におり、もし君に朝鮮人が手を出すようなら体を張って立ち向かうとノモンハン生き残りのY氏、関東軍遠山軍団のS氏など大いに意気が上がったのですが、いざその時になると全員寝たふりで驚きました。

でもその時にはすでにロシアマフィアの面々がバラツクの外で待機しており、彼ら朝鮮人に、「もし気が済むなら殺してもよい、ただしあなた達も一人残らず死

ぬ覚悟が出来ているなら」と言い、外にはロシアマフィアの者がバラックを取り巻いているので逃れられないけれどどうするか決めるよう迫ると、手でなぐるにとどまりましたが相当のダメージを受けました。

翌日には朝鮮人の幹部十人は懲罰収容所送りとなりました。ロシアマフィアすら懲罰収容所送りは顔色が変わる程でした。というのは、決して生きて帰れぬからです。その後は彼等も静かになり班を分割する必要もなくなり、同じ言葉の通じ合う仲間として仲良く過ごす事が出来ました。

その収容所は二千人の収容所で、炊事場も一般用と病院用の二カ所あり、余分に貰ってきて日本人の仲間 zu 食べてもらい、配給の黒パンが残るので日本人と朝鮮人の共同班に分け与えてあげることが出来ました。思えばここまでの道程は決して平坦なものではなく、常に死と直面しながら命懸けで生き抜いた年月でした。昭和二十七年、刑期満了の前年の秋に、日本人の一人N氏は洗濯物を大量に盗んだので、連帯責任をとり自ら申し出て他の収容所に移ることになりました。女

性と男性が一緒のカンスク市の収容所に行き木工場の仕事に従事することになり、製材の機械のところまで丸太を馬で運ぶ仕事でした。最初はロシアの馬で運んでおりましたが力がなく、暇なしに運ばねば間に合わず苦勞しましたが、ソ連兵が持て余していた日本の軍馬がおり、ソ連兵には嘸みつくやら蹴るやらで放し飼いにしておりましたのを手なづけて使い、三倍以上の能率を上げて大分楽をさせていただきました。その収容所も女性専用の収容所となり、我々は元の収容所の隣の木工場に移りました。

昭和二十六年十二月二十九日、丸太に足を挟まれ歩けなくなり元の収容所の外科病棟に入院しましたが、日本人や朝鮮人が次々と見舞いに来てくれて、差し入れもあり同室のロシア人達にうらやましがられたものです。幸いにも骨折しておらず、山に戻るよう言われましたが、院長と交渉し来春の刑期満了まで置いてもらうこととなり、交換条件として病棟の洗濯物をすることになりました。しかし、それも仲間がそれぞれ分かち合って洗濯してくれ、最後まで働くことなく満期の

日を迎えることが出来ました。

明けて昭和二十七年三月三日、満期の当日となり、「満期となったのでどこに行きたいか」と問われ、勿論日本に帰してくれるよう申し出ましたが許可されず、ならばせめて故郷の樺太に行きたいと言うとこれまた許可にならず「シベリアの中ならどこでも良い」との返答で困り果て、一人でも多くの日本人のいる所に行ってくれるように頼み調べた結果、同じ州のカンスク市には百余人の日本人が住んでいるとこのことでカンスク市を希望し出所することとなりましたが、既に支線の貨物車もなく午後四時になろうとしており、シベリアの春三月はもう暗夜となり気温も零下二十数度。仕方なく線路の上をシベリア鉄道の駅レシヨウテイに向けて一人で歩き始めて十二キロ強の道程を終え、町の灯りが見えて泣けそうなほどに灯火が恋しく感じました。自由の身とはなったもののカンスク市までの乗車券一枚のみの所持では泊まる所とてなく、また、食事すら出来ず、ただただ途方に暮れるばかりで、あての無いまま足は自然と収容所へと向いておりました。

なんとか一夜の宿をとお願いしましたが、「貴方はもう罪人ではないので泊めるわけにはいかない」とのこと。もっともな話ではありますがこの寒空野宿も出来ず、困惑し果てる有り様に同情してか「どこから来たのか、また、民族は」と問われ正直に実情を話すと、塙の外に道具小屋があり、刑期の軽いロシア人二人がおりそこに泊めてもらうことになり、地獄で仏の感じがして胸が熱くなりました。彼等二人と話はずみ、安眠をむさぼり、翌朝は彼等が黒パンを持たせてくれ無事に車上の人となり目的のカンクス市に到着しました。

目的地に着きましたが行く先も日本人の姿も無く、またも昨年いた収容所に向かう途中収容所で事務職をしていたラトビア人母娘と出会い、事情を話すと家に泊めてくれ、職と日本人探して市中を案内してくれて一週間お世話になりました。ようやくにして日本人が二十人程勤めている職場に就職することが出来ました。また、社宅も与えられ働き始めましたが、その職場は木材からアルコールを作る工場で、そこで使用する

石炭荷役の仕事で、工場では一日五百トンの石炭を使用し働く人も四千人程おり、勤務は夜中でも貨車が入ると出て行かねばならず、三昼夜にもおよぶこともあり一人平均六十トン程の石炭を貨車から降ろす作業でした。

自由の身とはなったものの、居住地より百キロ以上の旅は禁止されておりました。それでも百キロを越える所にノモンハンの生き残りの方が住んでいると聞き、当時交際していたロシア人の娘さんと夫婦に成りすまして訪ねて行き、会うことが出来ました。その方はすでに結婚し子供もあり、「祖国では戦死扱いになっているので帰ることは出来ない」と涙ながらに話し、遠くはシベリア出兵当時の捕虜や脱走兵の人々もいらっしやるとのことでした。彼は最後まで名前は明かしませんでした。その他数多くの同胞の方々が厳寒の異国に今もなお止むなく残留し、望郷の念を抱きながら散って行くことを思うとき断腸の思いがいたします。

戦後はや八年は過ぎ去り、帰国の夢も秋風と共に散り、ほとんど諦めの心境になり随分と無茶もしてきま

した。そんな折、昭和二十八年四月に突然親元に便りを出しても良いと通達があり、半信半疑ながら国に便りを出しました。他の方々はどうせ出しても届く筈もないと申して誰一人出ませんでした。

そろそろそんな事も忘れた秋九月に家族の便りを手にし、涙ながらに一気に読むも字がかすんで思うように読めず、幾度となく読み返し家族全員無事であることを知り、気が遠くなるほどの感激が心の中を駆け巡り、踊り上がりました。職場の日本人全員が奪い合うようにして読み、たちまち手紙は汚れすり切れてしまいました。

追い打ちをかけるようにして十月には警察の方から呼び出しがあり「日本に帰る意思があるか」と問われ、疑心暗鬼ながらも駄目で元々の心境でその場で帰国の申請をし、「日本の現状は大変な食糧難で餓死者が出ているので残留してはどうか」と勧められました。すでに自前のラジオで復興が進んでいることを知っており、また盛んにトンコ節など流れていましたので、残留は辞退しました。

早速、身の回りのすべてのことを整理して、いつでも移動できるように準備しました。多くの同胞は結婚もし子供もあり、心ならずも残留希望の者も出て全員帰還とはならず大変残念に思いました。種々と相談も受けましたが、後年に悔いを残すことの無いよう個々の判断で決めるようにとしか言いようがなく、相当数の方々が残留しました。

明けて昭和二十九年三月六日、カンスク市内の小学校に帰還希望者が集められ、最終手続きに入りました。過ぐる正月には、職場の日本人全員が一堂に会しお別れ会を兼ねての新年会をいたしました。樂しかるべき筈の新年会も今生の別れの会に思えて、残る者も帰る者も共に複雑な心境でした。小学校に集められたものの果たしてこのまま日本に帰してくれるのだろうか、ともすると今まで九年もの間騙され続けたので、どこかまた他の土地に強制移動させられるのではないかと疑わずにはおられませんでした。

残る者達は最後の別れを告げに学校まで見送りに来てくれましたが、その中の一人N氏は急に私共と行動

を共にしたいと申し出があり、早速係の者と交渉に入るも一歩も前進の無いままいたずらに時が流れていきました。

戦後ソ連に協力し罪もない人々を密告して甘い汁を吸い、やがては知り過ぎたが故に抑留された者若干名が帰国するということを知り、絶対ゆるすわけにはいかない、日本の土は踏ませないと言うと、早速残留の申請をしその場で許可されましたので、私は残留は認めて何故帰国申請は認めないのかと詰問すると「モスクワに連絡し許可を得なければならず、今からでは間に合わぬ」との返答で一向にらちが明かず、どうしてもN氏を連れて帰らねばと目の前の電話を指しモスクワの当局に通じるか尋ねたところ通話可能とのことで、早速口語で嘆願書を書き提出し、モスクワから許可を得ることに成功し共に帰国しました。

一週間の長旅の末によりやく極東の港ナホトカに到着し、帰りの船を待つ事になりました。それでもまだ、このまま知らぬ土地に連れて行かれるのではないかと疑いの心が晴れませんでした。

昭和二十九年三月十七日夕刻、夕食の時間でしたが、夢にまで見た白十字のマークを船腹につけた引揚船輿安丸が船尾に日の丸の旗を翻して入港して来るではありませんか。誰一人食堂に行く者としてなく一日千秋の思いで乗船の時を待ちました。

翌午前零時頃にいよいよ乗船の瞬間を迎え、体中に震えの来るほどの感動を覚えたものでした。点呼の名に答えるのもそこそこに駆けるようにしてタラップを渡り船のデッキに立つ。周りを見ると日本赤十字の看護婦さんたちが一斉に日の丸の小旗を振り「お帰りなさい、ご苦労様」と声を掛けてくださり、まるで菩薩様の声に聞こえ、全員また天女のごとくに美しく見えたものです。戦時中の女性の姿しか見てないので。久し振りに青畳の上に座り日本酒と山海の珍味に舌鼓を打ち、この世の天国を満喫し何時の間にか涙が止めどなく流れておりました。

三月二十日、遠く彼方に祖国の山並みを見て、全員感激がどよめきの声に変わりました。舞鶴の栈橋の上に祖国の第一歩を印し、感無量、ただただ涙あるのみ

でした。

午後には母と妹が舞鶴まで迎えに来てくれて九年振りの家族との対面、互いに抱き合って共に無事を慶び合い、肩が濡れるまで涙を流し話し合うも何から話してよいものやら。あまりにも長い間の別れに言葉も途切れがちで、今も何を話したのか覚えがありません。苦節九年、九死に一生を得て家族全員と巡り会うことを得て、ようやくにして長く苦しい旅の終わりを迎えることが出来ました。

帰国後国鉄に復職するも、組合運動に共鳴出来ず組合（共産党）に入らず吊るし上げをされ、リンチを受けて退職しました。昭和二十九年五月のことでしたが、悔いは無いです。

その後義兄と共に菓子製造卸業を始めるも見事に失敗しました。鉄工関係の会社を始めて六十歳で退職し、現在は年金生活の身の上ですが、戦前勤務と抑留中の年金はカットされての支給で、生まれて以来この方常に我慢とカットの人生もそろそろ終わりを告げようとしております。今でも抑留中の夢を見、特に帰国の列

車や船に間に合わず一人とり残され必死にもがいて目が覚めます。何時の日安らかな眠りにつけるものやら。心の平和と安らぎの日を待ちながらこの体験記を後世に残すこととします。

【執筆者の紹介】

昭和二年九月二十一日 父・友太郎、母・アサヨの二男として樺太豊榮郡草野村鉄道官舎で生まる。

昭和十五年三月 樺太公立豊原第二小学校六年の課程を卒業す。

昭和十七年三月 樺太公立大泊旭丘国民学校高等科二年を卒業す。

昭和十七年四月 樺太庁鉄道大泊車電所に就職す。

昭和十八年四月 樺太庁鉄道より国有鉄道移管。

昭和十九年 東京鉄道教習所車電科を修了す。

昭和十九年十二月 国鉄大泊車電所に戻る。

昭和二十年八月十五日 終戦を職場で迎える。

同時に十六歳以上（当時は数え

年）は国民戦闘隊員であり引揚証明書は交付されず、特に鉄道員は婦女子の引揚げ業務に就くよう命令される。

昭和二十年八月十七日 母と妹三人は鉄道の連絡船宗谷丸にて北海道に渡る。

昭和二十年八月二十一日 早朝父は密航し北海道に渡り、一人樺太にとり残される。

昭和二十年八月二十二日 日本軍隊脱走兵として旧大泊女学校に収容されるも夜半に脱走す。

昭和二十年八月二十三日 再度捕らわれるも脱走し長浜村に行き、父の無事密航に成功したことを知り安堵す。

昭和二十年九月一日 大泊町に戻り元の職場の勤務に戻る。

昭和二十一年一月 火災にて家を焼失す。

同日職場放棄に問われ、監視付きの身となり半ば抑留状態とな

る。

昭和二十二年二月六日 変圧器（高圧）三千三百ボルト漏電のため焼失し、故意の仕

業であり仲間と組んでやったと一昼夜にわたり拷問を受ける。

ロシア人に引き継ぎ業務のため

そのまま勤務を命ぜられ勤務す。

（給料は無く、黒パン支給のみ）

昭和二十二年三月三日 改めて裁判のため収容され、

未決房に行く迄の三日間、検察

のコンクリートの廊下に着た切

りで夏服のまま、食事も水も与

えられずに掃除の使役をさせら

れる。

昭和二十二年三月七日 豊原の収容所（旧刑務所）に

収監される。

昭和二十二年三月十四日 軍事裁判により刑期確定す。

（控訴し、二年加算）

昭和二十二年四月二十四日 真岡港よりシベリアに移

送される。（途中脱走に失敗）

昭和二十二年四月二十六日 ウラジオストック港に上

陸し収容所へ。（朝鮮人のリン

チ受く）

昭和二十二年五月 ハバロフスクでリウマチに。

昭和二十二年六月 クラスノヤルスク地方の収容所

ポイマに収容、伐採作業と土方

仕事に従事。朝鮮人九十五人の

中に日本人一人で、死の直前ま

でリンチを受ける。昭和二十二

年秋より強度の栄養失調のため

移動し、以後昭和二十四年秋ま

で日本人に会わず、その後また

も朝鮮人のリンチにあうも権力

もあり切り抜ける。

昭和二十七年三月三日 刑期満了し、カンスク市へ。

自由の身として日本人の職場に

勤務す。

昭和二十九年三月二十日 舞鶴港に上陸し帰国の夢を

実現す。(ナホトカ港より興安

丸にて)

昭和三十九年

藤山政治大学院修了す。

庄司さんは帰国後結婚されて三人のお子さんに恵まれました。三人共それぞれ独立生計されておりますので、現在は夫婦二人で余生を送っております。

氏は室蘭支部の事務局長として会の発展及び慰藉事業等に積極的にとり組んでおられます。

(北海道 森 英一)

戦争の悪夢と過ごした七年間

北海道 村岡 務

五族(日本人、朝鮮人、満人、漢民族、蒙古民族)協和の皇道楽土のためにと「白蘭の歌」、「支那の夜」、「蘇州夜曲」、「上海の花売り娘」等大陸への憧れを誘うような映画や歌が毎日街中を賑やかにしていた。

広漠とした大平原の彼方に真赤な太陽が沈む美しい大陸は冒険心旺盛な私の心を揺さぶり、その魅力に引き付けられたのは昭和十六年、十五歳の春であった。

職業安定所(旭川市二条十二丁目)で満州に行って働きたいと申し込みをしたところ、四月中旬に採用通知と共に旅費が支給となり、我が家に跳んで帰って母にその旨話をする。「そんな遠くへなぜ行くの」と泣かれたが、心はすでに満州大陸への夢と希望に満ちていた。五月一日に涙を流している母を駅プラットホームに残し、隣組や国防婦人会の人々の見送りを後に美瑛を一人旅立った。

茨城県友部村の満州鑛工義勇軍訓練所に入所。所属は、満州自動車製造株式会社技術員養成所の第一期生として全国から集まった四十五人が同じ会社の所属であった。北海道からは私一人であることに少し心細い気もしたが、強気で頑張ろうと決意を新たにした。

訓練所には約三千人の少年たちがそれぞれの会社別に部隊編成されていたが、私達は少数グループの集まりであった。多い所では満鉄の一千人、鑛工業関係五